

●発行日：2016年1月16日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

発行:教材出版 学林舎

寒中お見舞い申し上げます

旧年中は格別のお引立てを賜わり厚くお礼申し上げます。

弊社では、本年もより一層尽力をしておりますので、昨年同様のお引き立てを賜わりますようお願い申し上げます。

厳寒のみぎり、皆様方にはご自愛いただきますようお願い申し上げます。

学林舎スタッフ一同



AKURINSHA TOPICS

学林舎の行き先 特化した学習教材

学

林舎に求められること、学習塾に求められることは形は違いますが、“**特化した学習教育**”を提供しなければいけないことは同じであると私は考えています。

学林舎は、他の出版社と違うことを重ねてきたことによって現在があります。

- ・ 自立学習教材
- ・ 教科書補完から離れた教材
- ・ 考える学習教材
- ・ アメリカの教科書の活用
- ・ 理科実験にしばった教材の提案

これらのことは大手出版社では発行部数が見込めない教材などとして敬遠されてきました。ただ、ここ数年、大手出版社においても部数が見込めない教材でも発刊する傾向があります。理由のひとつは、印刷コストが 20 年、10 年前と比較すると安価になったことにあります。また、デジタル化することにより印刷コストが存在しなくなったのも理由のひとつです。大手出版社が変化してい

く中、学林舎自身が開発・提案してきた教材を深化させたいと考えています。今までは、教材開発、販売することによって学林舎のメッセージを伝えてきました。今後は、教材開発はもちろんのことですが、教材をどう使っていくのか、どう位置づけていくのかをわかりやすく学習者はもちろんのこと、現場で学習指導する皆さまに伝えていきたいと考えています。(北岡)

VOICE-現場からの声

「今後、塾は子どもたちに何を提供していけばいいのでしょうか？」

この質問は、塾の先生から従来型の塾運営（準
拠5教科指導・入試指導）に対しての行き詰まりから
でた言葉でした。

これからの塾に必要なのは**“特化”**です。準拠5教科指導というのは、スーパーでいうところの生鮮・家電・衣服・家具・飲食です。ただ、こういった形式のスーパーはどんどん閉店していつているのが現実です。**その塾にしかない学習指導、カリキュラム、環境を作り出せるかが今後、塾が塾として成立するかどうかのキーワード**です。作り出せないのであれば、業種転換、閉塾を考えなければいけない時期にきています。

学林舎の行き先

学林舎教材の可能性

学

林舎の教材は学習塾の先生からよく使いにくいという声を聞きます。

使いにくい最大の理由は「教科書補完＝教える」という目線で教材がつくられていないところにあります。多くの教材は、指導する側が教えやすい構成になっています。学林舎教材は、**学習する側が「自ら考え、学習をして、学習効果が上がることを基準に制作しています。」**

○教えるではなく、考えさせる

学林舎の成長する思考力G Tシリーズをご利用いただいている塾の多くは、教材の内容解説をしていくのではなく、**“学習者に考えさせる”**ということを目的に位置づけ、**指導**しています。学習者が「わかりません」と言った場合「何がわからないの？」と聞きます。その中で、学習者自身が考えていない場合や調べ学習をおこなっていない場合は「もう一度、考えて」と**“考えることを要求”**させます。学習現場によっては、成長する思考力G Tシリーズは“考える学習を定着させる”ために学習するというを事前に伝える場合もあります。そのため、成長する思考力G Tシリーズに関しては、教えるのではなく、“考えさせる”を基軸に指導しています。つまり、**“考えている時間”を評価基準の一つとして指導**されています。

○テーマは自立学習

学林舎の教材の中で「数学単元別」を積極的に使われている学習現場では、**“自立学習”の定着を目的のひとつ**に使われています。**数学単元別の特徴は、学習者が自ら読み、学習することによって、理解できる自立学習教材**です。そのため、自学できる学習者であれば「数学単元別」をどんどん進めて、1年間で中学数学の基礎を学習することは可能です。そのため、数学単元別を学習できることを目標に小学校で成長する思考力G Tシリーズを通して、考える学習の習慣づけを身につけさせる場合もあります。自立学習が成立している学習現場は、図書館のような静けさの中で、黙々と学習者が学習しています。

学林舎の教材は、テストや入試で結果をだすための教材ではありません。そういった視点から見れば、多くの学習塾が求められる**“成績アップ”“試験・入試対策”とはかなり距離がある**といえます。しかし、30年以上、学習現場で使われている理由は教材の制作目的はもちろんのこと、学習成果であると私は考えています。私自身も学林舎教材で育ってきたひとりとして、極論を言えば、小学生のうちに「成長する思考力G Tシリーズ国語・算数を10～5級」を中核に「力シリーズ」「算数ユニット」などを補足教材として学習できれば、**文部科学省が示す“表現力”“判断力”“思考力”の基礎・基盤は身につけることが可能です。**

大切なのは、“成績アップ”“試験・入試対策”を求めている子ども、保護者に何が学習教育において必要なのかを気づかせてあげることです。その気づきを弊社教材を使うことによって、未就学児童、小学校低学年のうちから取り組んでいただければと思います。(北岡)

未就学児童学習カリキュラム案 週:2～3回 時間:30～40分

①ウォーミングアップ学習 10-20分

②ブロック学習 10-15分 3～4歳
②とろびた学習 15-20分 4～5歳③クール
ダウン
学習5分

①ウォーミングアップ・ブロック学習

体を動かす前にウォーミングアップするのと同じように、頭を使う前にもウォーミングアップは必要です。

頭のウォーミングアップ学習として下記教材・教具を推奨します。

②とろびた学習

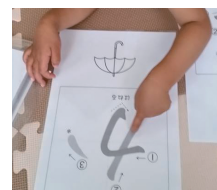
とろびたは、1回の学習で1-2ページを目安に10-15分学習することをおすすめしています。子どもの成長差によって、個人別、グループ別で学習をおこなってください。

③クールダウン学習

学習終わりの頭のクールダウンとして、シールなどを貼る作業学習を推奨します



絵入りひらがな地球儀



ラミネート教材シリーズ

国語を 考えてみる

文／学林舎国語顧問 森本 秀俊

ああ、素晴らしき哉、日本語^② - 大切なのは要点をしぼること

人と話をしていると、「話し上手な人だなあ」と感心させられる人もいれば、必死で話をしてくれているのに、どうも話の中身がつかみきれないような人もいます。どうして、そのような違いがあるのかな、といろいろ考えてみると、「**構成力、特に省略する力に差があるのではないかな**」と思うようになりました。

話の上手な人というのは、とにかく、「**ここだけは絶対に伝えたい**」というポイントをまずおさえてから、そのポイントが最後にぱっと輝くように、無駄なことは話さず、うまく話の流れをつないでいくようです。相手を笑わせるために、おもしろい話をするときに、こういう才能は見事に発揮されます。

こんな話を聞いたことがありました。

ぼくの友だちにIという奴がおってな。いい奴なんやけど、酒が無茶苦茶好きで、酔っぱらったらとんでもないことしてしまうことがあるんや。そいつが、会社の飲み会で、酔っぱらって、会社の近くの寮に住んでいる同僚に泊めてもらうことになったんや。ところが、その寮の近くに同じ会社の女子寮があって、Iは何を思ったのか、その女子寮の庭から道路に出ている木に登り始めたんや。そして、「女子寮の葉っぱは高く売れるんや」とか言いながら、葉っぱをいっぱいむしって、最後にはその葉っぱを仕事用のアタッシュケースに詰め込み始めたらしい。それで、アタッシュケースが葉っぱで一杯になると、近くの道路に停めておいた自分の車に入れて、そのまま、友だちの寮へ行って寝たんや。次の日に何が起ったと思う。Iが二日酔いの体で、車にもど

ると、何と車が車上荒らしにあって、そのアタッシュケースが盗まれとったんや。さて、被害を届けに行って、困ったのはIや。警察官に「アタッシュケースにはどんなものが入っていたのですか？」と聞かれて、「あ、あの、葉っぱがいっぱい入っていました。ちょっと仕事で必要なもので」とか言ってごまかしたみたいや。で、その後、Iが言った言葉。「あの車上荒らしの犯人もびっくりしたやろな。お金があると思ってかばん開けたら、葉っぱがいっぱいや。キツネにばかされたと思ったやろ」

これは実話らしいんですが、驚くような話ですね。この話をしてくれた人は、「キツネにばかされた」というオチを話すために、なかなか難しい話をうまくまとめて話しました。あまり話が長くなりすぎると、聞くほうがあきてきます。最後のオチにたどりつくまでに、聞き手の集中力がとぎれてしまうというのはよくあることです。話の上手な人は、むだなことはできるだけ避けて、自分が話したいことがきっちりと相手に伝わる最低限の情報をうまく組み込めます。

子どもの作文などを見ても、読みやすく興味をひく作文は切れがあります。そういう作文を書く子どもは、きっと人と話をするときも、てきぱきと自分の思っていることを伝えることができるんだろうなと思います。反対に、だらだらと説明を繰り返すような文章を読むと、「ああ、この子は人と話することに慣れていないんだなあ」と思ったりします。

今回はうまく話すコツとして、「無駄なことを省略する力」についてお話ししました。**お子さんに毎日、学校であった一番おもしろかった出来事を、一分とかの制限時間を設定して話させてみてください。最初はとまどうかもしれませんが、要点をしぼって短く話をまとめる力が次第についてくる**と思います。

ああ、素晴らしき哉、日本語。(つづく)

算数・数学から見える世界

文／学林舎算数・数学顧問 深見 和孝

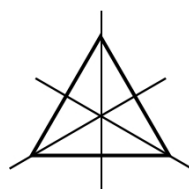
新年あけましておめでとうございます。本年1回目のコラムになります。前回、前々回と「数学的表現力」について書いていたところ、昨年の暮れに、タイムリーな話題が新聞で大きく取り上げられていました。それは、大学入試センター試験に代わる新テスト（2020年度から実施予定）についての記事で、試験問題に採用される〈記述式〉の問題例が公表されたというものです。現在のセンター試験はすべてマーク式のテストなので、記述式の問題が採用されたならば、教育界・受験業界ではインパクトのある話題といえます。記事によれば、記述問題は「文章作成を通じた思考力や表現力の評価につなげる」とのことです。問題例を見ながら「なるほどねえ〜」と思う一方、じゃあ表現力って文章作成の上手さなの？前回のコラムで「言葉による説明こそが数学的表現力のエンジン」と書いたのですが、どうやら私の解釈で的外れではなかったようです。

これまで「表現力」という観点は小中学校の専売特許という印象だったのですが、「大学入試においても表現力が重要」という見方が固まってくると、そのための授業・教材・テストのニーズがますます高まっていきそうです。この大学入試の新テストは、今の中学1年生が高校3年生になる年からスタートする予定だそうで、実際に記述式テストが実施されるとなれば、これからの小中学生は「表現力世代」と命名されるかもしれません。私が小中学生を教えた経験では、問題の答えといえば、式や計算だけを書く生徒が大半です。ところが**高校生になると、どういう意味の式なのか説明を加えることを要求**されます。高校の数学の先生は、式を書いただけの愛想のない答案は大嫌いで、小中学生のうちから答案作成のスキルを身につけておくことに異議を唱える方はまずおられないでしょう。

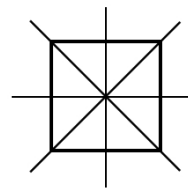
それでは、「数学的表現力」を評価する問題を出しますので、みなさんお考えください。

【問題】

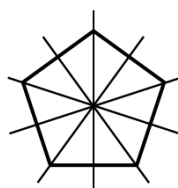
図形のなかには「線対称な図形」とよばれるものがあります。線対称な図形とは、ある線を折り目として二つ折りにしたときにぴったり重なる図形です。そして、このときの折り目となる線を「対称の軸」といいます。次の図は、正三角形、正四角形（正方形）、正五角形、正六角形の対称の軸がそれぞれ何本ひけるかを調べたものです。



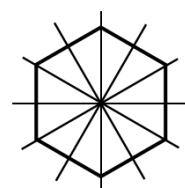
正三角形の軸は3本



正四角形の軸は4本



正五角形の軸は5本



正六角形の軸は6本

このように対称の軸の本数を調べた結果、 n という文字を使って「正 n 角形の対称の軸は n 本ある」といえそうですし、実際にそういえます。

では、このようにいえる理由を「頂点」「辺」という言葉を用いて説明して下さい。

ただし、「頂点や辺が1つ増えるごとに軸も1本ずつ増えるから。」という説明では、根拠に乏しくダメです。のでご注意を。解答は次回のコラムで発表させていただきます。(つづく)

クロスロード crossroad

第53回 文／吉田 良治

アスリートのセカンドキャリア

新しい年2016年の1月も半分が過ぎました。今年は4年に一度（夏季）オリンピックイヤー、ブラジル・リオで五輪・パラリンピックが開催されます。お正月もオリンピックに関連する競技を中心に、たくさんのスポーツイベントが開催されました。昨年はラグビーワールドカップで日本代表が強豪南アフリカに勝利する快挙を成し遂げ、オリンピック競技（7人制）にも採用されていることもあり、ラグビーブームの再炎が巻き起こりました。日本のスポーツ界は4年後の東京大会に向け、より一層強化に力を注いでいきます。

そこで一つ忘れてはいけないことはアスリートのセカンドキャリアです。近年日本でもアスリートの引退後の人生について取り上げることが増えてきました。毎年、年末になるとTBS系で『プロ野球戦力外通告 クビを宣告された男達』という番組が放送されます。所属していた球団から戦力外通告を受けたプロ野球選手が、引退か再起を図るのかを選択するエピソードを紹介しています。秋に行われるドラフト会議で輝かしいプロ野球の世界の入口の裏には、この世界を去る出口があります。プロ野球では1球団に所属できる選手枠は限られているので、ドラフト指名を受けプロの道に進む者の数だけ、この世界を去る者がいるのです。ある者は合同トライアウトを受け、ある者は引退し野球の指導者（プロ・アマ）や球団職員、そして解説者など何らかの形で野球界に残ることを模索、そしてある者は芸能界への転身を考えます。しかしこれらの職業の多くは、限られた一部の者にしか枠がありませんので、多くは他業種へ進むことになります。また、プロ野球選手にすら進めなかった大多数は、当然一生野球で人生を全うすることはありません。スポーツ選手の多くはそれがプロ・アマチュアに関わらず、多くは20代～30代で競技生活から引退をしていきます。

プロアスリートでも一般の社会人に比べると、半分以上の期間での引退となり、人生の半分以上の残りの人生を支えるため、職を得なければなりません。

近年一般職の分野の新卒採用においても、即戦力を求める傾向が高まっており、これまで体育会系と言われ企業から重宝されたアスリートも、未経験の分野への転身はそう簡単ではありません。野球で例えると野球未経験者をドラフト指名するプロ野球球団が無いように、一般的な仕事においても企業が給料を支払い、一から未経験者に手とり足取り仕事を教えることは、今後どんどん減っていくことになります。これまで日本ではスポーツさえできれば、学業を疎かにしても許されてきました。しかし、厳しい国際競争にさらされている日本の企業は、「ただ体力があり根性があるから体育会系を採用する」ということはなくなっていくと思います。その時、自分はスポーツのことしかわからない！では、せっかく頑張ってきた競技経験が無駄になります。

昨年阪神タイガースを退団したマット・マートン選手と以前対談したことがあり、アスリートのセカンドキャリアについても取り上げました。マートン選手も『全てのアスリートがスポーツで成功するわけではない。競技引退後に備え、自分のセカンドキャリアのベースを学生時代に養うことが重要』とアメリカの大学スポーツで取り組むライフスキルの取り組みについて、自身の経験談を語っていました。彼もこのままプロ野球から去るとなれば、大学に戻り別の分野での再スタートに備えることになります。ラグビー日本代表の筑波大学4年生福岡堅樹選手は、引退後医師を目指すということです。子どものころからしっかり学業と向き合っていなければ、大人になってからの選択肢は狭まります。スポーツのために学業を犠牲にせず文武両道を全うする。どちらも才能を発揮できる取り組みとして、日本でもアスリートサポートとして、ライフスキルプログラムの充実が求められます。

（つづく）

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。

全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog
<http://ameblo.jp/outside-the-box/>